

内田恒次郎小傳

あらねのや主人

旧幕府

三巻一十二号所載

明三三則良ノ筆ノ書ハ詠

内田恒次郎小傳

幕ノ妄説相唱候輩ハ王政復古ヲ異議致候

天朝ヲ棄ル論ニ相成返而天下兩立ノ端ヲ開キ
候テハ御不爲相成候事ニテ全ク以テ 天朝ノ
御爲メ奉存候赤心飽迄貫徹候様致度此段御賢
慮奉願上候此他聊々異存無御座候

卯十二月

堀内藏頭
山内攝津守

紀伊中納言殿

去ル二十一日登城被仰付御達ノ御事件唯々驚歎
痛笑ノ外無御座候右ニ付凡込モ有之候得者可申
旨奉畏候得共不肖ノ私獻言仕候程ノ確論モ無御
座候乍併往藉ヲ推考仕候ニモ政權ハ言論ヲ以テ
授受不相成者ニ候一者終ニ是迄ノ通リ御委任相
成太平ノ開化ニ沐シ候義ト竊ニ慰籍罷在候私共
此度ノ義ニ付言語沸騰致候而已モ人心混亂ノ端
ト切齒搥腕仕候右ニ付申上候ハ恐入候へ共私家
ノ義ハ先祖直重始テ臺徳廟ニ奉仕其大坂兩度ノ
御陣土井利勝ノ手ニ屬シ其節微功モ有之候ニ付
東照宮様ニ御取立ヲ蒙リ御恩祿頂戴仕候家筋ノ
義故既ニ先年中御譜代庶相願候義モ有之候處御

許容無之無據今日迄消光罷在候況ンヤ不肖ノ私
迄百餘年ノ御徳澤ヲ蒙リ候義ニ候得ハ此上如何
ノ時變相成候トモ幾重ニモ犬馬ノ勞ヲ盡シ御徳
澤千万分ノ一ヲモ奉報度志願ニ御座候間不肖ノ
身ニ相應シ候程ノ義ハ十分御奉公被仰付候様兼
テ各様迄相願置候以上

卯十月

堀内藏頭直虎 花押

稻葉美濃守殿

記者曰く堀氏の事跡は徳川旗下の士の外に
知る者少なく當年其人を識る者の常に嘆惜
する所なり茲には抄奪のまゝ掲載す他日一
傳に編するの日ある可し



内田恒次郎小傳

新刊別長茂

わられのや主人

(中博士内田正雄傳)

内田恒次郎は、百俵取の小普請万年千秋(今後備陸軍中)

(五三)

佐て沼津に退隠して居るの弟であつた、十八九歳で學問所の試問に甲科及第をして俊才の名を博した、其頃世運の進歩に連れて蘭學修業の志を起したか、恰も當時余は坪井信良(理學士坪井正五)の塾に在つて、蘭學の修業をして居つたので、或人か内田を紹介して來て、蘭學を教へて呉れると云ふ頼みだ、余は漸く十四五歳の時で、蘭學と云つても僅に其門に頭を突込んだに過ぎない、中々人に教へるなど、云ふ力がある譯のものではないけれど、其頃蘭學を遣つて居つた者は、醫者には少しはあつたが、士分では實に罕なものであるから、是非といふので、覺束ないけれどABCから始めて、蘭學の手解てはきをした、之れが内田恒次郎と知り合つたそも々々である

安政の初年、和蘭政府から蒸氣船(スチームボート)號一艘を、我幕府に獻貢して勸告した結果、旗下の士をして蒸氣船の操縦を、蘭人に就いて傳習させるとになつて、海軍練習所を長崎に設けられた、そこで傳習生は幕府直參の者の中から(薩摩佐賀其他の藩々)選抜して、幾度にも長崎へ

傳習御用を命せられたが、余も藩書調所へ出役して間もなく、其選に當つて出掛けるとになつた、此時内田は廿一二歳でもあつたらうか、兎に角學問所の甲科及第者と云ふ名譽を持つて、青年者中有數の英俊と認められ、殊に蘭學にも涉つて居ると云ふので、第一に政府の當局者から望を屬されて選ばれたので、余も同行するととなつて、長崎へ赴いた、

さて長崎に行つてからは、我々ど一所になつて蘭人の教師に隨ひ、航海運用測量語學などを學んで居つた、此蘭人の教師中にウィッヘルスと云ふ者か居たが、内田を大層愛した、夫れといふものは、内田は漢學の力のあるは勿論、一幹學才があつて出來榮が能く、殊に學事には非常に熱心な男であつたからであらうか、

安政六年であつた、幕府は種々なる都合上からして、此長崎練習所を廢せられ、蘭教師も歸國するとになつたので、余等の連中も江戸へ呼戻されて歸つたが、内田はウィッヘルスに頼んで、同人から其筋へ申立て、賞つて政府の許可を

(五四)

内田恒次郎の傳記
内田恒次郎、和蘭政府から蒸氣船一艘を、我幕府に獻貢して勸告した結果、旗下の士をして蒸氣船の操縦を、蘭人に就いて傳習させるとになつた、そこで傳習生は幕府直參の者の中から選抜して、幾度にも長崎へ傳習御用を命せられたが、余も藩書調所へ出役して間もなく、其選に當つて出掛けるとになつた、此時内田は廿一二歳でもあつたらうか、兎に角學問所の甲科及第者と云ふ名譽を持つて、青年者中有數の英俊と認められ、殊に蘭學にも涉つて居ると云ふので、第一に政府の當局者から望を屬されて選ばれたので、余も同行するととなつて、長崎へ赴いた、さて長崎に行つてからは、我々ど一所になつて蘭人の教師に隨ひ、航海運用測量語學などを學んで居つた、此蘭人の教師中にウィッヘルスと云ふ者か居たが、内田を大層愛した、夫れといふものは、内田は漢學の力のあるは勿論、一幹學才があつて出來榮が能く、殊に學事には非常に熱心な男であつたからであらうか、安政六年であつた、幕府は種々なる都合上からして、此長崎練習所を廢せられ、蘭教師も歸國するとになつたので、余等の連中も江戸へ呼戻されて歸つたが、内田はウィッヘルスに頼んで、同人から其筋へ申立て、賞つて政府の許可を



にも鑑別とが出来、内田か船中で自慢した玉細工の像などは、顔色なしと云ってよからう、とても比較物にはならない、内田も殆ど呆然たる有様で、垂涎三尺其室を去り兼ねた位であつた、之れから後は内田が自慢の観世音菩薩も、靴の底へでも仕舞ひこまれたのか、御姿は再び現はれなかつた、

内田は審美心に富んで居つた、書生仲間では相應に美術品の鑑識があつたと思ふ、それに内田家は簾下で裕かの方ではあるし、自分は三百俵の俸給を賜はつて居る身分であつたから、自然骨董品などを捻くるとが出来たのであらう、日本書などもちよつと書いた腕があつて、和蘭渡航中にも各地の景色や風俗などを寫し、和蘭へ行つてからも同く筆を執つて居つた、其傍ら寫真を荐りに蒐集して居たか、追々土地に居馴染んで、油繪を屢々見るに付け、大に日本畫の及はざる所あるに感服し、油繪師に就いて熱心に其技術を研究したか、歸朝する頃には少しは描けるやうになつた、後年輿地誌畧を著した時

挿入した繪畫の多くは、和蘭在留中に得た所のものである、

和蘭に在留中、内田の細君、即ち家付の御嬢さんたる片目で跛の細君は、江戸で病死した、此訃音か和蘭へ達したとき、内田の朋友は揃つて旅宿に訪問れて、不幸を吊つたが、扱其あどで異口同音に、一杯奢りたまへと云つたとがある、内田も悔みと悦ひとを同時に受けたので、挨拶に狼狽した様子か餘程妙であつたと、笑話の種に其當座は残つて居つた、一昧内田は神經質の男であつた、己れか志たとは飽迄窮めやうと思つて、随分感服する位物事に熱心になる方であつたが、惜いとは些細なことにも心配して、氣か安んじない爲めに、大局に眼を注ぐとか出来なかつた、之れか此男の欠點である併し當時の蕪本などの多くは、知行所の百姓をいびつて其日を碌々として暮して居る、其中で兎に角此男位進取の氣力に富んで居つた者は、珍らしかつたのである、

品行は方正で、酒は殆ど呑まなかつた否呑めな

いのである、前にも云ツた通り、朋友からは吝
嗇坊と綽名を付けらるゝ程の節儉家であつたか
ら、内田は酒か呑めないのではない、錢か惜い
のたど嘲ける者もあつた、併し之れは全く悪口
に過ぎない、尤も人に愛せらるゝ性質ではない
俗に云ふ角のある人で、殊に自分の家柄を誇ッ
て、何ソとなく他を輕ンする様な風か見えたと
ど、留學生一行の取締と云ふのを鼻に掛けて、
朋友に命令を下す様な事か度々あつたので、留
學生の氣受は甚た良くない、であるから他の書
生も壯年者の常として、故意に内田の云ふとに
背くやうな鹽梅で、内田は又例の小心な男であ
るから、怒ふなると彌よ激して來るといふ始末
で、時々意見の衝突が起ツた、
幕府から逃へた軍艦開陽丸の進水も丁り、日本
へ廻航する様になつたので、内田も榎本澤
などの留學生と共に、開陽丸に便乗してやがて
歸朝した、榎本は歸朝後間もなく海軍奉行とな
り、澤も府の海軍に仕へたか、内田は性得船
量に感し易いので、極く船に乗るのを嫌ツて居

つた、夫故でもあらうか、和蘭へ往つても海軍
の事は殆ど學ばなかつた、で内田は歸朝しても
海軍の方は避けて、開成所の教授方に這入ツて
仕舞ツて、遂に文事で一生を送るやうな次第に
なつた、
維新の際幕府の海陸軍に籍を置いたものは、世
祿を擲ツて大概脱走を企て、遂に逆境に身を陥
れたが、内田は軍事に職を奉して居らなかつた
爲めでもあつたらうか、それとも大勢の趨く
所に心付いたのでもあらうか、直に朝廷に仕へ
て、矢張引續いて開成所に勤め、一身上左程の
變動もなく、安々と駿河臺に邸を構へて其日を
送ツた、開成所か本校と改まり、官制の變更か
あつた時に、大學中博士に任せられ、正六位に
叙せられたが、例の氣質であるから、同僚との
交際か圓滑にいかなかつたのが原因でもあつ
たらう、遂に官を辭して民間に下り、著譯の業
に従事した、此頃輿地誌畧の海軍沿革史など
の有益な著述かあつたので、是等の著を紀念物
として、明治十年に病歿した、内田の著書中の

輿地誌略が、我國當時の教育界に與へたる効果の偉大なものであつたとは、今更云ふまでもなく、世の人の知る所である、

史 籠

伏見戦争前後の記事

(故岡崎撫松氏寄送)

先供の旨相答候處御上洛に候へば不苦旨相答候處薩人シヤハリ出今日弊藩當番に有之徳川家之御人數は壹人も爲通候事不相成と申ながら散兵排列發砲跡に續き兵隊之左右村家より伏兵發り同時砲發大にさへへられ候處桑名大砲隊より點火打放いたし候に付散兵大にひるみ候其隙に手負等始末いたし歩兵後隊退々駈來互に陳列をなし打合となるも不絶にせり合と相成勝負未決に候へとも歩兵隊は面々一步不退奮戦いたし居候

一伏見之方竹中丹後守人數着するや否薩之小隊

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and ghosting.)

歩掛五香宮の高地より大砲相打出し不意を被打候得共少しも構はず傳習兵構内へ臥しなから彼を打しらまし一同大苦戦終に夜に入五香宮を救秘今朝藤の森之要地に椅子大砲を据へ敵兵を追散らし退々進入の勢ひに御座候
一兵庫は開陽富士山蟠龍にて彼之船を徹座にいたし候積手配今十二時打放之積之處彼より是亦砲發に付即時打沈候由に候へ共いまだ確報無之候

一當地藏屋敷三ヶ所今曉遠卷いたし一應達し書相渡遅々いたし候へは討取へき手筈之處人數押出し候刻限江戸堀屋敷自焼いたし三屋敷とも脱走いたし空屋に相成候に付今日諸家へ御預け相成申候諸取締中市巡邏等無油斷申付置候事
一外國公使共前文配兵之刻限前布告書に相達護衛を増候處一同難有更に苦情等も無之事
右は別紙之續編筆に隨ひ相認此段申進候以上

浪花

閏老一名

正月四日 江戸

(五九)

